

Title	A short history of British Commonwealth 2vols. by Ramsay Muir
Sub Title	
Author	占部, 百太郎(Urabe, Hyakutaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.3 (1923. 5) ,p.155(461)- 156(462)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230500-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の二つに歸せられる。清朝を覆し民族的獨立を恢復することは兎も角も成功したが、革命の最終目的たる國家國民の再造復活と云ふ大事業は、空しく挫折し失敗した。之は革命黨が袁世凱と妥協し彼に大總統の榮職を與へしにその端を發する。袁を總統とすることは此の姦物に共和政治破壊の機會を與へるのみならず、彼を圍饒する清朝以來の官僚と弊風陋俗とをなして依然勢力を逞しうせしめる所以であつた云々。

著者の言の如く「民族の獨立」「國家の改造」を標語として起つた革命運動が、前者の實現に成功して後者の遂行に挫折した事情は悲しむべきであるが、かくの如き大事業は一朝一夕にして完成なし得べきものではあるまい。兎に角這般の革命は支那民族の特色たりしその舊式國家觀を葬り去り、外國輸入の新國家組織を樹立した支那政治上の大變動であり、近世支那國民の遭遇したる一大政治的試練であつた。此重要な一場面が如何なる俳優により如何にして演出されたか。その経緯を縦横に叙し來つた此「支那革命史」の一卷は種々なる意味に於て支那研究上の好個の資料である。吾人は之によつて隣邦新人が如何なる熱情をもつて支那改造の運動にたづさばりしかを知ることが出来る。支那人の國民性が此大事件を通じて如何に發輝せられたかを窺ふことが出来る。歴史家も政治家も教育家も實業家も本篇を通じて無限の教訓を汲みとり、將來に對する指針を樹立することが出来るやう。要するに本書は苟しくも隣邦支那の事情を論ずるもの、是非一本を机上に備ふべき良著であり、吾人は此貴重な述作を學界に呈供されし著者の勞苦に對し感謝に堪へぬものである。

(松本信廣)

A Short History of British Commonwealth wealth 2 vols. by Ramsay Muir

マンチェスター大學近世史教授であつた著者は、數年前 The Culmination of Modern History 三冊 (I. Nationalism and Internationalism, II. National Self-government, III. The Expansion of Europe) を著して、歴史家として奈何に造詣の深い學者であるかと云ふことを示した。本書は Short History と冠してあるけれど、上下二冊何れも菊版八百頁に餘る大冊である。有名なるグリーンの大英國民史 (Short History of English People) も、グリーン夫人の増補を加算すれば千頁に餘る決して Short でない大作であるが、是れば其れ以上に Short でない大作である。併し大作必ずしも傑作ではない。ポラード教授が家庭大學叢書の一に加へた英國史は、菊版半折貳百五十頁の小冊子であるけれど、同叢書中途に傑出した名著たるを失はない。ミュア氏の A Short History of the British Commonwealth は大作であるが、同時に傑作であるか什麼か。

法制とか、文學とか、藝術とか、若くは社會及び經濟とか、特殊の方面を取扱つた歴史は別として、政治を中心とした一般の英國歴史に關するスタンダードナルクだけでも、今や枚擧するに遑ない程である。フリーマンやグリーンやヒュームやフロードやマコーレーやレッキの各時代に關する歴史は、今日では寧ろクラシックスとして尊重す可きものが多い。最近二十年の間にも、

ロングマン會社發行ハント、プー爾兩氏の編輯に繋る十二冊の英國政治史と、メシユーン書店發行オーマン教授編輯の七冊から成る英國史とが出版せられた。此他一時代一事件を取扱つた輓近の著作で、名著と稱せらる可きものも多少はあらう。併し上記の二大叢書に就て見ても、専門の學者が其れなく得意の時代を主題としたと云ふ長處の反面には、スタイルの相違は已むを得ないとしても、同一事件の評論が繰返されるとか、前後全然相反した史的觀察が列べらるる等の欠點を免れない。ところが本書は英國史千數百年を通じて、一人の手に成つたものであるから、這般の欠點は發見せられない。本書は元、教師用並に大學生の教課用に充てんが爲めにも書かれたものではあるけれど、著者の主要なる目的は一般讀者に向て英吉利帝國發展の貴ぶ可き史實を面白く分りよく説明するに在るのだから、各時代を通じて特殊の根本研究の跡を求むることは、固より多きを望むものである。併し諸處に著者の獨創と認む可き史眼の閃きが見はれて、讀者をして清新の氣に打たしむるものがある。

從來の英國史は英吉利本國の出來事に重きを措き過ぎた憾があつたが、本書は其の標題の示すが如く、英吉利帝國發展の徑路に主力を注いだ點が、其の特色と認めらるゝ。獨逸から侵入してアリトン人種を征服したアングロ・サクソン民族が、表面はノルマン人に征服せられた形ちだけれど、其實これを同化して今日の英國人を形成し、其れが次第に發展して、先づウェールズを征服し、次に蘇格蘭と愛蘭とを合同し、一方には北米十三州を失つたけれど、他方には加奈陀に、南阿に、印度に濠洲に繁殖した大英帝國

の建設は、昔時の羅馬帝國の盛大にも譲らざる世界歴史上の一大壯觀である。ミユアー氏の着眼點はアングロ・サクソン民族が此の如く世界に濶歩する行程を叙するに在るのだから、従つて氏の史筆の接觸する範圍は、勢廣く四海に亘らざるを得ない。英國と歐羅巴を始め、英國が世界的帝國を建設するに方つて接觸した諸國との關係が、比較的精細に描寫せられて居る所以である。又か、その見地からすれば、英國が未だ歐羅巴の一小國であつた千四百八十五年(チユードル朝の初)までの記事に、上卷の四分の一だけを割き、而して英帝國が急激に大西洋に、亞細亞に、亞米利加に發展したジョルジ三世の治世以後に下卷八百十四頁が向けられて居ることも、固より當然の取扱方であつて、決して其間の均衝を失つたものと言ふことは出來ぬ。

其れから著者の文體も亦少なからず本書の價値を加ふるものであると思ふ。ミユアー氏のスタイルは、適勁で流暢で所謂垢抜けがして居る。著者は平凡に陥ることを避くる爲め、從來の歴史家が書き古したあり振れた英國歴史上のエピソードや知れ切つた事件の記事は殆ど全く省略して居る。これが讀者にフレッシュの感を與ふことは言ふまでもないのみならず、著者に些か術學的態度の見へぬのも、少なからず快感を讀者に與へる所以であらう。之を要するに、本書は唯だ量に於て近來の大作であるのみならず、實質に於ても亦容易に得可らざる傑作である。グリーンの大英國史に劣らざる或は其れ以上の傑作として英米の讀書界に好評噴々たること、決して故なしとしない。

(占部百太郎)